

R-18
R18



AWB

REC

0:05:12

AUTO REC

SD

百合スカ×背徳行為小説誌

immoral
goes down
試し読み版

R18

AM07:49



43分

SD 2h03m

AVGHD 1080p

MENU

Immoral goes down

試し読み版 目次

遥か彼方、手の届かない場所にあるもの ……004

遥かに望み、手の届く距離にあったもの ……030

#盗撮 #覗き #自慰 #偏愛 #同性愛

ガーリッシュハートエイク

シンガリンカ ハニージャム

Sing-a-Link-a-HoneyJam ……060

#排泄支配 #幼児退行 #同性愛 #共依存

あとがき ……080

奥付 ……084

小説 / もちづきうずめ

イラスト / 友屋勘九郎

遙か彼方、手の届かない場所にあるもの

初夏の頃、五月。早朝の部室に爽やかな朝の光が差し込んでいる。

日光に透かされ舞う砂埃は浮かれて／逸る私の気持ちのよう。今か今かと待ちわびる私の耳に、靴音の福音が聞こえた。早足の足音に遅れて、ドアノブが鳴る。

「ハルちゃん、もう来てたんだ。おはよー」

「おはようございますっ。朝練が楽しみで早く着いちゃって」嘘だ。

二日ぶりの彼方かなたセンパイの声はとてもきらきらと聞こえた。

「今着替えるから、ちよつと待っててね」

背中を向けてブラウスを脱いでいるセンパイを見つめる。センパイの引き締まったカラダを飾り立てる橙色の肌着。大きな大きな果実を包む、センパイお気に入りブラ。汗をかく季節なのに、朝練後に白いブラウスの下でオレンジ色が透けてしまうことにセンパイは気づいていない。

「早朝なのに暑いねー。もう汗かいちゃった」

「えっ、はい、そうですね」

引き締まったお尻を凝視してて反応が遅れる。ブラと同じ色のショーツに指をかけて食い込みを直す指遣いに視線が奪われる。

「行こっか」

「あっはいっ」

毎日、四〇分ちよつとの朝練。

高校のグラウンドを独占する、二人だけの時間が始まる。

約半年前までのセンパイの印象は、宙に浮いている、だった。

陸上部の誰とでも仲がよく、人当たりもよくて、社交的で優しい。だけど特別仲のいい人はいない。犬猿の仲もない。人の悪口を言わないし聞くときは嫌な顔をする。でも褒めるところは見たことがない。分け隔てなく接してくれるけど深入りしない。言い争いも喧嘩もしない。誰とでも一定の距離を保つ、八方美人。仲よし同士や同じ競技でグループのできた陸上部内の何処にも属さない、宙に浮いた人。

今年の一月頃、日和見な先輩のイメージは一変した。

事なかれ主義に見えた水平みずはらかなた彼方は一人の後輩に。孤立したとある部員に。陸上部の一年生に。

当時の私——望海のぞみはるか遥の誰もいないスペースに踏み込んできた。

「よかったら一緒に朝練しない？ 私、寂しいんだ」

いじめに加担しなければ、仲介もしない。加害はしないが被害も避ける。そんな先

輩の、気まぐれだったのだと思う。

思惑も。打算も。侮蔑にも似た優しさすらも。あのときの私にはあつたかすぎた。理由なきいじめに立ち向かった代償はあまりにも大きかった。だけど正しさと履き違えた蛮勇で浮いた私に差し出された手は、あまりにも大きく。

穴の空いた人間が誰かを好きになる理由なんて、あつけない。

私は彼方センパイのことが、大好きだ。

時間をたっぷりかけたウォームアップから体幹トレーニング、じっくりとランニングをこなして四〇分少し。センパイと一緒に隣で走ることができるようなら夏の不快な朝も冬の気怠い朝も全然辛くない。

「そろそろ終わろつか。おつかれさまっ」

「センパイ、お疲れ様です」

グラウンドに刻まれた二人だけの足跡が途切れるのを惜しみつつ部室に戻る。七時三〇分。もちろん誰もいない。

整いすぎている顔の汗を拭くセンパイも、熟れた唇でスポーツドリンクを啣るセンパイも、首元をぱたぱたして扇情的に谷間を見せるセンパイも、全部私だけのもの。

センパイと仲のいい三年の同級生も知らない。

きれいなタオルで顔を拭うときに鼻息を荒くして芳香剤の香りを楽しむかわい
ところ。

センパイを慕う二年生も知らない。

ドリンクで渴きを潤した直後にけふっ、と喉から息を吐くところ。

センパイを頼りにする一年生も知らない。

新鮮な汗に濡れた大きな胸を惜しげもなく晒しているところ。

他の誰かがいるときはお淑やかな、私だけのはしたないセンパイ。

「どうしたの？ そんなに見て」

「えっ、いえっ、なんでもっ」

普段は清楚に振る舞ってるのに、気が緩んで素の自分を見せるセンパイ、きっと私
だけが知っている彼方センパイ。

他の部員がいる部室ではおとなしいのに、心を許した？／信頼した？／好き
な？？？／本当の自分を見せてもいい……？／私にだけ、多分きつとそう、私にだ
け！

赤裸々な相談をしてくれるし、着替えやシャワーのときも全然隠さないし、笑って
くれるし、それにそれにそれに。

いちばん仲のいい私にだけ。半年ずっと欠かさず朝練を続けた私にだけ。朝一番のおはようをもらえる／あげられる私にだけ。ペアの柔軟体操でお互いの肢体の伸ばせる限界を知っている私にだけ。毎日走り込んで切磋琢磨してきた私にだけ。シャンプーの貸し借りのときにブースに入っても許してくれる私にだけ生理用品を気軽に貸し合える私にだけ事故を装って胸に触れても拒まれない私にだけ間接キスになっても一切恥ずかしがらないし逆に照れてくれる私にだけ。

ありのままの彼方センパイを知り尽くしているのは、望海遥だけ。

「まだ朝なのに、今日も暑かったですね」

「ほんとに暑かった！ これからもっと蒸し暑くなるって思うと授業がユウツだよ」

「じゃあ憂鬱になるお勉強の前に早くシャワー浴びにいきましょうよ。私もすっごい汗かいていました」

初夏の早朝での熱気ですら乙女の肌すぐに傷む。べたつき、匂い、清潔感には気がなつて当たり前前のもの。でも私の通う高校には清掃の行き届いたシャワールームがあつて、生徒なら誰でも利用できる。

もちろん朝練の後はセンパイと一緒にシャワールームに行つて、汗を流すのが楽しみだ。

朝練をする生徒なんてほとんどいないから二人きり、隣同士のブースで他愛のない会話をして、水の音に隠れる吐息に耳を済ませて、ふざけてセンパイのブースに入り込んで、誰もいなかったら隠されない胸やおへそやセンパイの整えられた茂みに埋もれたま——ゴホン、お股を凝視して。こんなことができるのも、私だけ。

「これ以上汗をかく前に行きましよう！」

スポーツバッグにバスタオルと制服を詰め、部室を出る。

何をするときだってセンパイと一緒にいたい。朝練だって移動するときだって食堂に行くときも放課後部室に向かう時間も陸上部の練習スペースに集まるときも下校のときもプライベートでお買い物に行くときも。いつだって、どんなときも。もちろん、シャワーだって絶対に一緒にがいい。

「あつ、ハルちゃん、その前に」

振り返るとセンパイは着替えの入ったカバンではなくポーチを手にしていた。そしてはにかんだ笑みでそつとお腹を抑え、

「先にいつもの済ませてくるね」

「トイレ、ですか？」

センパイの爪先は今から向かうはずのシャワールームの方ではなく、屋外部室棟の端にあるトイレの方角を向いていた。

「なら体育館のトイレでいいじゃないですか」

「もく毎日のことなのに、わざと聞いてる？ ハルちゃんはいじわるだね？」

部室棟トイレは和式便器しかない上にじめじめしていて暗い。染みついたアンモニアの臭いもひどい。ほんの少しだけ時間をかければ校舎や体育館の、整備されて洋式便器もある清潔なトイレに行けるのに。

お急ぎのときや靴を履き替えるのが手間じゃないなら、みんな校舎の方に出向くくらい、居心地の悪い不衛生なトイレだ。

「うんこのときは部室棟のトイレじゃないと落ち着かないだもん。それに校舎のトイレだと誰か来るからやっぱり恥ずかしいし」

いつものとは、トイレのこと。それもおしっこじゃなくて、毎朝の……お通じ限定の言い回し。

豊満なカラダも、月のことも、甘い相談もさらけ出してくれるセンパイは、日々誰もがすることとはいえトイレのことも、私にだけはさらりと告白する。うんこをしてくると、報告する。

朝練を始めた頃は「ちよつとトイレ行ってくるね」とこそこそ。

次第に「トイレ行くね。ちよつと時間かかるかも」とほのめかし。

春になって学年があがったくらいには「うんこしてくるね」とあまりにも直球な単

語で排泄欲を伝えてくるようになった。

「じゃあ先にシャワールーム行ってますね」

「えー怖いから一緒にトイレ行こうよー！ 女の子同士、連れションしよーよ」

「センパイがするのションじゃなくてう、ウンですよ？ 一人でしてください。それに怖いって子供じゃないんですから」

「なんか最近朝の部室棟トイレにしていると視線を感じる気がして。誰もいないはずなんだけどなー」

ぞくつ。

「しせん、ですか……。幽霊でもいるんですか？ そうやって気を引いてもだめですからね」

「ハルちゃんも大きい方、したくなってない？ さっきからお腹さすってるよね。一緒にしようよ」

バレてた。実は朝練が終わったくらいから大きい方を催している。

でもセンパイと一緒にトイレなんて、そんなの無理っ！

「私は大丈夫ですから」

「うーんつれないなあ。他の子が来るかもしれない校舎のトイレでうんこできるなんて、勇気あるなあ」

「ガマンしますから、いいんですっ」

「我慢はカラダに悪いよ？ それとも私と一緒に恥ずかしいかな」

「え、あの、そういうわけじゃ……」

「じゃあうんこ済ませてくるから、また後でね。しばらく出てないから、ようやくすつきりできそう〜」

部室前で別れ、少し歩幅の大きいセンパイの背中を見送る。

私に便意を言うのは恥ずかしくない、大便のときもトイレに誘ってくる、でも使うのは不衛生な部室棟トイレ。人気のない、朝は誰も来ないトイレ。

他の生徒が来る可能性のある体育館や校舎のトイレで大きい方は恥ずかしい、でも毎日朝練の前後にしたくなるから……というのがセンパイの言い分そして日課だった。

『毎朝しないと調子出ないし、授業中に行きたくなっちゃって』

『うんこの後にクラスメイトに会うとちよつと気まずいよね』

『和式トイレの方がスッキリできる気がしない？』

頬を赤くして、照れ隠し気味に、同調を求めるように呟いていた言葉を思い出す。

「誘わないでくださいよ、それも大きい方のときに……」

トイレ、それも匂いや音の出るウンチなんてどれだけ仲良しな相手でも隠したく

なるものなのに、催していることを正直に言うだけならまだしも、出してるときに一緒にいてよ、なんて。いくら私だってセンパイのいる前でウンチをするのは、絶対にできない。

私も、当然センパイだって人だからおしっこやウンチをする。完璧で優しい水平彼方でも、醜い望海遥でも。同じ人間だから、出るものは出る。センパイがトイレでおしっこしたり、早寝早起きで三食しっかり食べて健康的な生活を送って走った後に催したのを我慢できなくてみんなの使う学校の汚い和式便器に跨って下半身を丸出しにしてお尻を広げて声を漏らして踏ん張って桜色の肛門からすると黄土色のバナナウンチをぶりぶり音を立てながら毎朝排泄していることに幻滅はしないけど、私の尿や大便是汚い。一緒にいられないの。

「はやくいこ……」

消えていく背中を見ないように、走って校舎に飛び込んだ。



動かない景色。

微かなノイズの中。時折拾うのは無音と風の鳴く声。

ばたばたばた……。

その目が映す風景に何も動きはない。映るのは薄汚れた白い物体と、剥がれた塗装の壁、砂が散らばり黒ずんだ薄桃色のタイル。

マイクが足音を拾う。徐々に近づいてくる。やがて目に陰が落ち、人影が映った。

足が目の前で止まりボタン、と大きな衝撃音と共に風景が揺れる。ドアが閉まった衝撃で目——カメラが振動したせいだ。かちん、と鍵のかかる頃には揺れは落ち着いて、床に埋め込まれた和式便器とそれを跨ぐ脚部をしつかりと録画している。

感情のないレンズは後ろ向きの子を撮り続ける。床すれすれの高さに隠された小型カメラの撮る範囲は狭く、少し離れた位置で立ったままの誰かの膝裏より上は捉えられていない。

走り込んで鍛えられた補足、だが硬い肉付きの下腿。白く清潔な運動用ソックス。そして踵の場所に黒の油性ペンで【3年 水平】と記名された運動靴。

『んっ、しょっ、つと……』

もそもそと衣服の擦れる音。下着とハーフパンツを下ろしながらしゃがみ込む。カメラいっぱい小ぶりで引き締まった臀部が広がっており、若い女子特有のきめ細かく柔らかく弾みそうな白のお尻がうっすらと汗をまもっていた。

屋外部室棟女子トイレ、三基ある和式便器の個室の最奥、掃除用具庫に面した小部

屋で今まさに彼女は用を足そうとし——隠しカメラに汗ばんだお尻を晒した。

用具庫と個室の間は仕切り壁と色と材質の違う、後付のベニヤで塞がれている。本当は隙間があったが、覗きに手を染めた生徒がいて、塞がれたのだと先輩の誰かが言っていた。

くり抜かれた穴からレンズが覗く。彼女の排泄姿を覗いている。

ぷくつとした鮮やかなピンク色の肛門、その奥に覗える内からめくれた女性器、そして陰毛の森。少し上向きに角度のつけられたカメラは人においそれと見せることのない恥部を鮮明に映していた。

『んっ』

小さくさえざると、便器に向けて放尿を始めた。起きてから自宅で一回済ませたのかちよろちよろおだやかな、だが走った後で老廃物を多く含んだ少し濃い黄色のおしっこ。

つつ、とお尻にしずくが走る。陰唇に放物線が引っかかり、尿が逸れて右手側の尻たぶを伝って便器に滴っている。

『ふー』

たったの数秒で放尿は途切れ、息を吐く。だが彼女はじつとかがんだまま。

「いよいよ……」

少量の排尿のために彼女はトイレに来たわけではないだろう。

すり足で片足ずつ一歩前に出た。足幅もついでに少し広く開ける。

『ふうう』

重心が落ち、まるまるなお尻がぐつと便器に接近した。お尻の割れ目に潜む桜色の蕾が花卉を抜げていく――。



「あれっハルちゃんだ。どうしたの？」

「あっセンパイ」

部室前で別れてから約五分後。シャワールームのある体育館と部室棟を結ぶ中庭の通路でセンパイと鉢合わせる。

「忘れ物？」

「えっと、その、あー……どうしても我慢、できなくなっ

困り顔でお腹を押さえてみる。聞かれなかったら黙っていたい、でも尋ねられてしまったら答えないといけないから、そんな風に目を反らして。

ふーん、とセンパイがニヤリと笑う。

「もしかして、うんこしたくなっちゃった？」

「はい……」

「体育館のトイレの方がずっと近かったよね？ どこに行くのかな」

「あの、もう……さつきは悪かったです、むう」

わざと体育館トイレに誘導した仕返しができて満足できたのか得意げに顔を綻ばせた。

「うんこ、するんだ？」

「直球で聞かないでください。そうです、ウンチです。体育館のトイレ、誰かいたから、その、もうセンパイのトイレ終わったかなと思って……」

「だから一緒にトイレ行こうって言ったのにー」

「だって、その、」

センパイが隣にいと……っ。

「そうだよね。やっぱり人前でするのは恥ずかしいし、私がいたら気になるよね」

「その、ごめんなさい」

「なんで謝るの？ 恥ずかしいのは当たり前だもん。私はハルちゃんなら気にならないけど」

謝らないといけない。センパイを傷つけてしまうから。なんでも一緒、大親友のは

ずなのに、こんな私だから。

センパイと一緒に部室棟トイレでできたらどれだけいいことだろう。でも、どうしてもするときはやっぱり、一人で、部室棟のトイレじゃないとだめ、だから。

「私は数日ぶりのうんこしてスッキリしたよ。ハルちゃんもスッキリできるといいね」

「出たとか報告しなくていいですから。じゃあ、また」

堪らなくなつて思わず駆け出して逃げる。

寂しそうなセンパイの表情。罪悪感。わかつてる。それでも。

「はやく、トイレ……」

土日を挟んだ三日分がもう抑えきれない。

センパイの無邪気にトイレに誘う魔性の声音。毎朝のお通じを隠さない私への信用。一緒にいてもいいという信頼。センパイとなら、隣にいても大きい方をしたって、気にならない。

だけど、そういうことじゃない。

一緒にトイレをするなんて、私にはできない。



「ごめんなさい、ごめんなさい……」

個室の仕切り壁とは別の色、後付けで覗き防止用に仕切り壁に打たれた用具庫側と個室側の二枚のベニヤ。用具庫にある掃除用具の棚の後ろ、破かれた隙間に隠され、カメラが息を潜めている。

朝一番に来てこっそりと仕込んだ、超小型カメラ。

小さいとはいえ一昔前の携帯電話なみの画質と音質はあり、しっかりと肛門の伸び縮みと被写体の声を拾っている。

普段の息み方より弱く、力がこもっていない。後ろ側から隠し撮りしているカメラでは捉えられないがしゃがんだ手元、膝のところで何かを剥がしている。

使い捨てのナプキン。やっぱり、月の日だったんだ。剥がし丸めてサニタリーボックスに捨てている間も息んでいるが、意識は生理用品のつけ外しに向けられている。

部室で着替えているときにショーツから羽根が見えていたし、少しテンポの遅れたジョギング、トイレに行くときに手にしたポーチ。把握していた周期と合致して鼓動が昂ぶってしまう。

平日は朝練後にほぼ催すセンパイでも、月の日になるとお通じが悪くなる。ごくたまに朝練の後に「全然出なかった」と気を落としていることがあった。重くなると日

課のジョギングも控えめになって、お腹に刺激が足りないのか余計に催しにくくなる。今日は早めに切り上げなかったから生理の終わり際なのだと思う。

今日は月曜日。重い期間が土日と重なっていた。土曜の部活は元気がなかったし、日曜も自主的にスポーツをしているセンパイだけど、メッセージで聞いたら休養していたらしい。

生理、運動不足、一日ぶりの運動。今日はセンパイにとっては長くお通じが止まっていた後に催すかもしれない日。

だからどうしても、我慢できなかった。

『んっ。ん……』

新品をつけ直し、本格的に息み始めた。

無数に刻まれたしわが伸び、ゆっくりと昏い穴の経を拡げていく。詰まっているはずの黒い塊はまだ見えない。

『うん、はあ、んっ』

トイレに誰もいないときは短く喘ぐような声を出して息む。まれに誰かが用を足しに来たときは声を殺していたし、音を立てないよう慎重になっていた。

たった一度だけセンパイがウンチをしているときに、同じトイレにいたことがあつた。そのときセンパイは声を抑えていたし、ウンチが出る直前に音消しをしていた。

今年の冬、三ヶ月前の話。今だったら、センパイはどうするのか。隠しちゃうかな、流しながらウンチ、しちゃうのかな。ウンチのときに誘ってくれるってことは、隠したりはしない、かも。

『うんっ、ん、ん……』

お腹をさすって衣服が擦れた音。いつもなら軽快に出るセンパイのバナナウンチは見えてこない。やつぱりセンパイ、しばらくお通じが止まってたんだ。じゃあ、もしかして。

ぐぐぐ……

『んっ！ ふううーん……ん？ うんっ』

うそ、いつもは短い息み声なのに子供みたいに大きな声で踏ん張ってる！ すぐにウンチが出てこないから力を入れてるんだ。ウンチがすぐに出ないときはこうやって気張ってるんだ。

すごい、知らなかった。色づいて切ない声音の踏ん張り声。ウンチを出そうと、頑張ってる！

初めて視るセンパイの便秘排便に、喉が熱くなる。

くちゅ くちゅ

「センパイ、センパイ……！」

一分近く気張り続け、ようやく出てきた。センパイの肛門から硬そうなのが、水分が枯れて黒ずんだセンパイの便秘ウンチ、大きいの……見えてきたっ！ 乾いてヒビの入った茶褐色の塊がずるずる、ゆっくり、降りてくる。

『んツ。んゝツ。うゝん、はぁぁ。うーん！』

センパイがこんなに気張ってるのに、なかなかウンチは進まない。気張るたびに数センチ動いて黒い棒が垂れ下がる。ゴツゴツした表面、重量感はあるのにちぎれる様子は無い。お腹の中で詰まって止まって押し固まって、密度たつぷりのセンパイウンチ。数日分のウンチ。金曜日の部活帰りに寄り道して食べあいつこしたクレープもきつとあの中に溶けてる。センパイがかわいいお口で食べたかわいいスイーツが、ウンチになって出ようとしてる。

『あつ、出そう……』

「ん、センパイ、っ、私も、出そう、です」

センパイが一生懸命踏ん張ってるのを見ていたら、私もウンチが出そうになってきた。金曜日から出なかつた、ううん、必死に我慢してきた三日分の大便が早く外に出たいと肛門を全力でこじ開けている。センパイの便秘ウンチと違って一息で便器に吐き出せるくらい強烈な便秘。

土曜日。ほのかな便意を何度も無視して。

日曜日。何度もトイレに行きたくなるのを抑えて。

今日。朝のおしっここのときに出そうになって手で押し込んだもの。

センパイが生理で便秘になると気づいてから興味があった。センパイの便秘ウンチと一緒にウンチがしたい。

センパイがウンチしたトイレで、毎朝ウンチをするときの指定席、部室棟女子トイレの一番奥。センパイがいい匂いのウンチをした後の個室でっ！ 気持ちいいことがしたくて、したくて。

「センパイ、早くしてっ、私、ウンチ、出ちゃう……！」

カメラのSDカードを挿したスマホの映像に向かって急かしても意味はないけど、我慢の限界で応援してしまう。ウンチを踏ん張るセンパイがかわいくて、新鮮で、がんばれって言うてしまう。

起きてから、登校中、センパイを待つ間も、朝練中も、やっとセンパイが催したとわかって先にシャワールームに行ったときも。放課後にこっそりと盗撮動画を見ながらするつもりだったのに、……どうしても我慢、できなくなつて。

オ○ニーもウンチも、放課後まで我慢なんてできるわけない。センパイが大きいウンチをするかもってわかった土曜日から二日も自慰と排便を我慢して。放課後まで耐えようとしてたのに、私がシャワールームでじっとお股を抑えて性欲を堪えてい

る間にウンチをしてるって思ったたら……止められなかった。

『んっ、でる。ふううん、うんっ、んっ、うーん』

「んっ、センパイっ、あッ、んッ、んくうっ♡ はあっ、ああっ」

蜜壺を触る手が止まらない。気持ちよくて全身が溶け出しそう。

「センパイのウンチ、はああ、大きいよお、すごい、あッ、あ、はああ、ん、んう……んっ♡」

犯罪行為だつてわかってる。隠し撮りして、しかもそれを見ながらオ○ニーなんてでもやめられないんです。

二週間近く盗撮欲求を抑えてたのに、センパイが便秘になるって思ったたら、我慢が、できなくて——！

気持ちよくて、情けなくて、罪悪感に押し殺されそう。罪の意識に心臓がねじ切れそうになってるのに、涙が出るくらい反省してたはずなのに、濡れた股間を擦るのを止められない。

今すぐやめなきや、動画を消して、普通にウンチして、だめ、したいっ、気持ちいいウンチ、お尻の間際で抑えていられた私のウンチがずるずる出てきてるっ、だめっ、センパイと一緒に、いっ！

『ん、んっ。うん、うーん、うーん、うーん、うーんっ!!』

「んっあんっんっんっんっ！ 私も、うっっんっんっ♡」

イク、出る、センパイのウンチを見ながら、一緒にウンチっ！！

『うっっんっんっんっんっ！——はあああああ……！！』

ミチ ミチチ ミチミチミチミチミチ ブリブリブリッ！！

センパイのウンチが重力に引かれてすごい勢いで出てきてる！ すごい、大きい

の、センパイのお尻から、あ、だめ！ イクうっ！ イッちゃう——ッ！！

「んっ、ああっ！ ん——ッ！！ ああああああああ♡♡」

センパイのウンチが着地した瞬間、桃色の落雷。

ウンチを踏ん張る必要はなかった——絶頂で肛門がゆるみ、ものすごい勢いでお尻から放たれているのがわかる。

オ○ニーとウンチの恍惚が混ざり合い、抗いがたい電撃が全身を駆け巡る。しゃがんだままでいられなくなっ膝をつき、股間を慰めていた右手で排水パイプを握りしめて至上の快感に打ちひしがれる。

こんなに気持ちいいウンチ、はじめて……！！

『はあああああ……。んふっ』

ぶりぶりぶりぶりにちにちに……ぶうっ

センパイおならもしながらまだウンチしてる。私も三日我慢してたから、今イキな

がらウンチ出てるよ。絶頂の恍惚で閉められなくなったお尻から、いっぱい出てる。

四つん這いの姿勢でウンチなんて、かっこ悪い……。でも、きもちいいよお♡

ぶりぶり にちにちにちにち……。ぶりぶりぶりっ

『ふう。スツキリしたあー』

私もすつきりしちゃった、センパイ。

『すご……大きいうんこ、しちゃった。きもちい……』

誰もいないからって恥ずかしい独り言つぶやいてる、かわいい。本当に大きかったです、センパイすごいです、あんなに大きくて太いのをがんばってうんっつてして、本当に気持ちよかったですね♡

私も珍しく我慢していっぱい出したから気持ちよかったです……。

「あ、あああ……ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……っ」

便意と全能感が失せゆくと同時に残るのは罪悪感。

今日も盗撮をしてしまった。今日もセンパイのウンチで自慰をしてしまった。センパイの使ったあとのトイレでウンチをしてしまった。

私を信頼してくれている純情な笑顔を、裏切ってしまった。

「ごめん、なさい」

センパイのウンチが見たい。だけどこんな悪いことはやめたい。

シャワーを急かしたのも、体育館のトイレを促したのも、心のどこかでは盗み撮りが失敗して、解放されたかったから。

私の前で気をゆるめるセンパイ。裸を隠さないセンパイ。恥ずかしい相談もしてくるセンパイ。便意を伏せないセンパイ。

だけど、用を足している姿だけは、見せてくれない。

三ヶ月前、二月。

センパイが「うんこしたくなってきた……かも。ハルちゃんも一緒にトイレ、行く？」と何気なく聞いてきたのがはじまりだった。

はじめてトイレに誘われて、そんな趣向はなかったけど、しゃがんでいるところを見れると思っていて、でも目の前で閉ざされたドア。

センパイがトイレをするところが、見たくなった。

次の朝練後トイレでふざけた体で同じ個室に入ろうとしたら、戸惑った顔で「もふざけちゃだめだよ」とやんわり拒絶されたときからセンパイと一緒にトイレには行っていない。

だって次に一緒にトイレに行ってしまったら、覗きが我慢できないってわかっているから。

センパイの何もかもが知りたい。センパイのトイレしているところが見たい。お

しつこじゃなくて、ウンチをしているところが見たい。

毎朝気をゆるめてするウンチが見たい。休み時間に隣の個室や待ってる友達を気にしてする恥じらいウンチじゃなくて、家でするような、リラックスしてウンチを気張るところが見たい。

見たいだけなら同じ女子なんだから、ウンチをしているところにいてもいいって言われたんだから。ドアの隙間から、唯一塞がれていないドアの下から覗けばいい、だけど。

覗きをしたってバレたら、気づかれたら。もう二度とセンパイと一緒にいられなくなる。

私にすら見せてくれないトイレを覗いてバレちゃったら、どうなるかなんてわからない。でも見たい。おしっこ、ウンチ、トイレでする全ての行為を見てみたい。おしっこの放物線や勢い、肛門からどうやってウンチをするのかこの目で確かめたくて、しょうがない。

だけどそれは悪いこと。わかっているのに、同じトイレにいれば覗きを我慢できる自信がない。排泄を覗くに留まらず、押し入って襲ってしまうかもしれない。

だから、盗撮をしてしまいました。

これなら気づかれない。用具庫の棚の裏から穴を開け、こっそり通販で買った超小

型カメラを隠して。カメラがバレたとしても証拠がなければ女子の私は疑われない。本当はやっちゃいけないってわかっているのに。便秘のウンチが見れるとわかって、頭が真っ白になった。

今日も我慢、できなかった。

「はあ……。戻らなきゃ。シャワー……」

性器とお尻を拭き、ふと後ろを振り向いたとき。

もうカメラは取り外したはずなのに。巧妙に隠された覗き穴の暗がりが卑怯者を覗き込んでいた。

そこにはないはずのレンズが、人間の屑を撮り続けている。

遥かに望み、手の届く距離にあったもの

もう二度とやりません。

抗えない力で右手が股間に引き寄せられ、すぐに誓いを破ってしまふ。意志が弱い。悪いことだとわかっているのに、動画を消すことができない。

「あつ、はあつ、ウンチ、センパイのウンチ、んっ、んんっ♡」

枕に立て掛けたスマートフォンが再生する映像には、カメラに背中を向けてお尻からウンチをぶらさげる女子生徒が映っていた。薄暗い女子トイレの和式便器にしゃがむ女生徒が尻を曝け出しているところを、鮮明に捉えていた。

スピーカーからは途切れ途切れの耳心地のいい息み声と、泥濘を這いずるような……大便が粘膜を擦り落ちてくる音が聞こえてくる。

女の子の排泄を隠し撮りした、あつてはならない動画だった。

「センパイ、がんばって、あ、だめ、もう、んん……っ♡」

力強く、深くお尻が沈み込む。息む声が上がらず、お腹から響いて私の耳をくすぐった。

「んっ、ん、ふ、はああ♡ んんッ、あつセンパイ、あつ……っ♡」

排泄音と水音が甘美に絡み合う。ウンチの音と、私の股ぐらで粘液がかき混ぜられ

る音。センパイが出すと同時に、達したい。膨らんだ甘い果実を撫でる指遣いが加速する。

『ん、出る……』

「待って、センパイ、私も、私も一緒に、イク……っ♡」

『う……んっ——ふう』

「んっ♡ あ、あ、あッ！ ん——ッ♡♡♡」

被写体のお尻からウンチが落ちた瞬間、目の奥で閃光が爆ぜた。甘い味の電撃が全細胞を駆け巡り、痺れ、蕩け、足が砕けてベッドに倒れ込む。極上の幸福感がお腹の下から溢れ出し、自分が自分でいられなくなる。

身動きできずベッドの上で痙攣する無防備な耳元で、センパイのウンチの音だけがやけに大きく響いている。無重力めいた浮遊感のまま排便音を聞いては壊れた吐息をこぼし、腰を跳ねさせる。

絶頂感が落ち着き、『すつきりしたぁ』の声とともに水を流すところでなんとか一時停止ボタンを押す。

「せんぱい、せんぱい……♡ 私もすつきり、した、ぁ♡」

今日もいっぱいウンチをしてたんですね、センパイ♡

砕け散った全身を薄桃色の熱が支配する。墮落と淫靡の味がする、重く粘ついた火

照り。暑気も汗臭さも忘れる高熱に包まれている内は、何も考えられないから幸せだった。いつまでも体内で弾ける電撃と熱に浮かされて紅潮している間は、とても気持ちがいい。

「……………ごめん、なさい」

でも性欲の熱はすぐに冷めてしまう。お布団に吸われて、部屋中に霧散して、体内に溶けて。

毒にも似た快感が、氷の如き痛みを心臓に残して冷えていく。

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさいごめんなさい……………。センパイ、ごめん、なさい」

最上の快楽が跳ね上げた鼓動の喧騒。生の感触が波動する、赤色の脈動が全身に波紋を広げていた。だけど罪悪感に包まれた瞬間、同じ心拍数のまま凍てつく紫色になつて、波打つ。

私が 望海遙が 罪悪感の波濤に 押し潰される。

「ごめんなさい。今日もまた、我慢ができませんでした」

オ○ニーすることは、悪いことじゃない。センパイもそういうコトしてるって、話してたから。センパイがおもちゃ使つて楽しんでるって真っ赤になりながら話してくれた日は本当に頭がくらくらしてしまって、帰宅して寝るまで三回もシちゃった

のを思い出す。

「だけどセンパイのことを想って自慰に耽るのは、悪いことだ。それもセンパイの排泄を隠し撮りした動画でオ○ニーなんて……！」

盗撮は犯罪だとわかっているのに、やめられない。

「もう、やめよう。……消さなきゃ」

一時間強の録画から、センパイのいる時間だけを切り取った三分強の盗撮動画。

今日撮ったばかりで朝練後も授業中も部活中も帰ってからもずっと見たくて／見ちゃだめだと自制して、結局できなくて。そもそも盗撮だって今日こそ辞めようって誓ったのに、今日で最後にしようって負けて。撮っちゃって、見ちゃって、しちゃって、気持ちよくなっちゃって。

「ホント、最低だ」

わかかって、どうしてやっちゃうんだろう。

あ、センパイが出て行くところまで、見なきゃ。つい五分前まで見たくて見たくてしようがなくて、両親と弟が寝静まるまで待ってたのに、今じゃ後ろめたいデータの塊と化している。

……惰性で再生ボタンを押す。残りは立ち上がって下着を整えトイレを出るだけの絵だろう。せめて最後まで見なきゃ、なんてのは盗っ人猛々しい、よね。

いつも通り立ってからショーツとハーフパンツを直し、鍵に手をかけた。そして――振り返る。

彼方センパイと目が合った。

心臓に激痛が走る。すぐにセンパイが退室し、そこで動画は止まる。

「うそ、バレた……？」

巧妙に仕切りに隠した小さい小さい穴の目と、センパイの視線が交差した。間違いなく、カメラ越しに私を視ていた。

動画のセンパイは一秒に満たない時間だけ私を見つめて、すぐにトイレを出ていった。私は急いで盗撮のオリジナルデータのセンパイの排便後を早回しで再生していく。トイレに戻って穴を調べるようなことも、用具庫を探る様子はなかった。最後、私がカメラを取り出して録画停止ボタンを押して、再生が止まる。

「たまたまカメラ近くのゴミとか汚れが目に入って、それだけ、それだけだよね。うん」

センパイに不審なところはなかったし、シャワーの後にすぐカメラも回収したから証拠もない。

それに一度カメラを隠した穴を覗かれたことはあったけど、それからセンパイが露骨に警戒したりカメラを仕掛けている現場を抑えられたりしたことはなかった。

あのときセンパイは吐きたくて便器にしゃがんでいたようだし、たまたま穴を見つめたように見えただけかもしれないし。

やっぱり、バレルの前に、やめなきや。隙間から覗くよりも、だめなことだし、私を救ってくれたセンパイを裏切る最低の行為だもん。やめなきや。やめなきや。やめなきや……。

股間で粘つく冷えた体液を拭いているときは、すごく惨めになる。絶頂に浸ったのと同じ秒数だけ、人としての尊厳を失って息をする肉塊に成り下がった気分になる。人権を無くせば、いつだってそうなれる。露見してないだけで、望海遥は軽犯罪法に該当する人でなし。人で無いなら、肉の塊だ。

「もう、寝よう」

罪の意識に蝕まれても、呼吸をする肉になってしまっても、犯罪に手を染めてでも——彼方センパイの誰にも見せない姿を覗き見ることが、やめられない。抗えない、肥えた欲望。天使も悪魔もこぞって純粋な／邪悪な手招きをする。

「あ、寝る前にトイレ行こ……」

洗面所に行って粘ついた手を洗い、ついでにトイレで用を足す。あつたかい便座に腰掛けて、背を伸ばしておしっこをする。

二時間ほど前、お風呂に入る前におしっこを済ませていたから出るものは少ない。

だけどおしつこもついでのようなもので、便座に腰掛けた主目的は、便意。
ウンチがしたかった。

「ん……」

オ○ニーの途中からにわかになんか便意を催していて、ウンチがしたいのを我慢していた。無視できる程度の、放っておけば忘れるようなかすかな欲求。さすがにベッドの上で解き放つわけにもいかず、ただ股間の愛撫を中断できるほど冷静ではなかった。

「ん、うんっ……」

にちにちにちにち……ぶり にちっ

「センパイ。私もウンチ、するね」

ぶりぶりぶりっ ぼちゃん

最近、オ○ニーをしていると——センパイのことを考えて気持ちよくなっている
と、ウンチがしたくなる。

学校でセンパイがウンチをした後のトイレで、オ○ニーを繰り返したからかもしれない。
朝の学校でオ○ニーするのが癖になってからはわざと朝に家でウンチをしないで、

センパイが使った後のトイレでいじりながらウンチしてたから、癖になっちゃった

の、かも。

特にセンパイのウンチしてる動画を見ながら同時にうんってするのは、最高に気持ちいい。

朝練後に決まって催すセンパイのように、私もオニーと一緒にウンチしてたら、身体が覚えたのかな。

「ん、ふ、んー……んっ」

ぷりっ ぽちゃん ぷりりり ぷりっ

ウンチ、出た……。

排便量はそこまで多くなく、覗き込んだ便器に小指ほどのウンチが二本と小さい欠片が浮かんでいる。

汚くて臭い、汚物だ。

尿道から排出される熱い液体は彼方センパイの出すモノと同じなのに。肛門からひり出される臭い固形物はセンパイの息むモノと変わりないはずなのに。どうして私のはこんな汚くて不快に感じられるのだろう。自分の汚物には興奮できないけど、センパイの出すおしっこやウンチは、とてもいやらしい気分になっちゃう。

でも、人の排泄物に興奮するのは、だめなこと。

彼方センパイのおしっここの音が好き。尿道から出るしゅいーって音、便器に跳ねた

り水たまりに弾けたりした音。ウンチの後にぷすーって漏れる音。にちにちってバナウンチの出る音。

「あれ……私ってセンパイの排泄物が好きなんだっけ」

わからない。でも隠し撮りした動画でセンパイがおしっこやウンチをしているのを見てしまうと、頭がぐるぐるする。お腹の下が熱くなって、足の付け根がかゆくなる。いつの間にか指先が湿った密林をまさぐっていて、透き通った蜜をかき混ぜている。オ○ニーの欲求に抗えなくなっていて、果てるまで止められない。

股とお尻を拭いて、トイレを出ようとする。ふと振り返ると天井の電球が私を見ていた。

私室に戻り、電気を消して布団に潜る。

「はあ……明日から、やめよう」

天井の、ナツメ球の光が私を見ていた。

小さい穴から覗かれているセンパイの代わりに、私を覗いている。



六月も半ば、野球なら甲子園の予選大会、テニスなどでも県大会予選が近づいて各

部とも高揚感と緊張感を背負うようになる。陸上部も例外ではない。されども所詮は定員割れの公立高校、部活動にさほど力が入っているわけじゃない。

陸上部で朝練をするのは私と彼方センパイだけで、他の部でも滅多に朝から練習に励む生徒を見ることはない。さすがに最後の大会の数日前となれば今更がんばる人も出てくるのだろう。

私は二年生で、彼方センパイは三年生。たとえどれだけセンパイが高校生離れした記録を保持していても、いつか引退する。

朝練を一緒にできる日は、あとどれだけだろう。

「……最低だ」

少しだけ、盗撮できなくなることを憂いてしまった。そうじゃない、心無い手に束縛された私を引きずり出してくれたセンパイが親しくしてくれる日は、守ってくれる日は着実に少なくなってきた。センパイのくれた優しさを仇で返している場合ではない。

朝、一人だけの部室。汗と多様な制汗剤と置かれた消臭剤の匂いが混交した息苦しい部屋。センパイが来るまで待つ、長くて短い時間が好きだ。……私が、ちゃんとセンパイのことを好きなんだって実感ができて、安心する。

「ごめんね、お待たせ」

来た。夏服のブラウスが眩しい、彼方センパイ。

「おはようございます、センパイっ」

「うん、おはよう。いつも早いね」

「センパイを待たせるわけにはいきませんか」

早いのは先に着替えてセンパイのお着替えを見たいっていうのもあるけど、前までは先にカメラを仕込むためだった。ううん、今日からやめるって決めた。悪いことは、やらない。

センパイがスカートを脱いでいる。女子だけしかいなくてもいそいそと下着を隠すように着替えるのに、私の前では無防備。ゆっくり脱いで、お尻を向けたままいてくれる。

「そんなにじーっと見て、どうしたの？」

「いえ、そのっ！ 見てませんっ」

「別にハルちゃんならいいけど、何かごみでもついていた？」

「あ、えつと、センパイらしくない、下着だなつて」

センパイのお尻とお股を包むのは、深みのある濃い赤と華美なレースに飾られた、とても大人っぽい印象のあるショートだった。学校では装飾控えめでかわいめな色のものしか穿いてなかったのに。

「これ？ たまにはいいかなって、お気に入りの穿いてきちゃった」

「へえ、センパイそういうえっちなの好きなんですね」

「えっちって、もうハルちゃんやらしく。そんなにヘンかな？」

「変じゃないですよ。今日テストとかで気合入れてるとか？」

「んーどうかな。気分だよ、気分」

そんなこと今までなかったのに、何かあるのかな。でもちよつとセクシーなセンパイ見れたし、今日はいいことあるかもっ！

「ほら、ブラも赤いんだよ」

ブラウスのボタンを外して豊満な胸元を見せつけてくる。

「オトナですね。似合ってますよ」

「でしょ。褒めてもらえてうれしいな」

素晴らしいものを堪能させてもらって、もうすぐ楽しい朝練の時間。天候は曇りのち雨だけど、まだ降ってない。しばらくは問題なさそう。

「今日はちよつと涼しいですね」

「え、うん……」

下着を自慢するほど機嫌のよかったセンパイが、突然語気を弱めて着替えていた手を止めた。

「ハルちゃん、えっと、今トイレ行きたい？」

「いえ、別に」

「そっか、じゃあ……朝練の前にトイレしてきて、いい？」

慌ててハーフパンツを穿き上げ、ジャージとウインドブレーカーに袖を通していく。足踏みをしながら、腰をくねらせ、何かを我慢しているように。

「おしっこですか？」

「ううん、ちよっとしたくなっちゃって。その、大きい方」

センパイは何気なくお腹を擦った。練習前にウンチなんて、珍しいかも。それ以上に何か違和感があったけど……あれ？

「えっと、はい、どうぞ」

「すぐ済ませるから、ここで待っていてくれる？」

「え、あ、はい。私のことは気にしないで、ごゆっくり」

力強くドアを開けて飛び出すセンパイ。足音は部室棟トイレの方に遠ざかっていった。

「あんなに慌てて、どうしたんだろ」

今まで朝練前にトイレに行くことはほとんどなかったし、あってもおしっこだけだったのに大きい方って言ったよね。

それに私にはうんこって言うのに、大きい方って呟いた。それに。

「待ってて、って——！」

恥じらいなくうんこって口にする人が、いちいちうんこしてくるって言うってくるセンパイが、一緒にうんこしようって無邪気に誘ってくる彼方センパイが。

もしかして、お腹の調子が悪くて、恥ずかしい……？

センパイ、どうしたのかな。風邪気味なのかな。夏だから傷んだものでも食べたのかな。毎朝快便で、生理のときは便秘になるけど減多にお腹がゆるまないっぽいのに。そういえばポーチ持って行ってたっけ。でもまだ周期じゃないはず、早まったのかな。そのせいでお腹の調子が悪くなった？

「センパイ、今、ウンチしてる。ゆるいの？ やわらかいの？」

でもお腹の具合がよくないときは、そうだって教えてくれる。ちよつとゆるくて時間かかっちゃったとか、朝練後に教えてくれたことはあったから。

じゃあ、お腹を壊してる……!?

絶対に、下痢してる。きつとそうだ。ここ最近普通のウンチ出てたけど、二ヶ月前くらい、四月から五月にかけてはお腹の調子があまりよくなさそうな動画が多かった。バナナウンチの後に水分多めの軟便をしたり、お腹擦ってたことがあった。それに「ちよつとお腹の調子が悪くて」と断って足早にトイレに行くこともあったっ

け。

それに一度だけ、朝練後にセンパイが明らかにお腹を下した様子でトイレに行ったことがあった。

確か今年の入学式の二日後くらい……隠し撮りに手を染めてしまったって間もない頃、朝練後に便意を告げてトイレに行ったセンパイが帰ってきたと思ったら顔面蒼白で、気持ち悪くなって嘔吐したと告白してきた。朝から具合が悪かったのか直後に腹痛を訴え、校舎の方のトイレに駆けだしていった。

お腹を抱えて走っていった背中はどうしようもない渴きを感じたのを覚えている。カメラを仕掛けていたのになぜか校舎の方のトイレに行ってしまったため、センパイの下痢排便をカメラに収めることができなかった。カメラには嘔吐した姿は捉えられていたけど、下痢を見せてくれなかったのは残念に思っていた。

センパイが私の知るところで下痢を催していたのは、あれっきり。あのときはセンパイが駆け込んだ校舎のトイレの入り口から先に進めなくて、下痢をしていることを見れなかった——じゃない、具合の悪いセンパイをほったらかしにしてしまったのは……後悔している。

助けてあげられなかったことと。

ドア一枚分遠くても下痢の音や臭いを堪能できなかったことを。

トイレの中まで踏み込んでいたら、きつと覗きの衝動を抑えきれなかった。

「センパイの、下痢。下痢の、ウンチ」

あるとき私は一〇分くらいずっと、出入りする生徒に怪しい目を向けられながら立ち竦んでいた。時折聞こえてくる水を流す音や何度もペーパーを巻く音は今でも耳に残っている。その場で股間をいじらなかつただけ、まだ人間だった。

「はああ、でもあの後のオ〇ニー、最高だった」

予鈴が鳴り、トイレのドアの開く音で我に返った私は性欲を抑えきれず部室棟トイレに駆け込み、カメラを回収して——センパイが嘔吐をしていた動画を見ながら吐瀉物の飛沫が残るトイレで、オ〇ニーをしちゃった。一時間目のチャイムなんかおかまいなしで、誰も来ないトイレで薄らいだゲロの臭いに狂いながら、ずっと、ずっと。

思い出したら、またしたくなってきた。

あれ以来、センパイが下痢をしているところも、下痢をしたという話を聞くこともなかった。

センパイだってたまにはお腹の調子が悪くなることはあるだろうけど、その姿やその話題を聞くことはまるでなかった。

「センパイの下痢。ウンチ。下痢ウンチ」

多少ゆるいくらいなら報告してくれるセンパイが、言葉を濁してまでトイレに行く理由なんか、下痢しか考えられない。

喉が乾く。口内で溢れた唾を飲み込んでみる。嚥下の音よりも心臓の鼓動がうるさくて、飲み込めたかわからなかった。そう錯覚するくらい、飲み込んでも飲み込んで、唾液がなくならない。

ウンチ。センパイのウンチ。朝練前に我慢できなくなったウンチ。お腹の調子が悪いウンチ。私にすら知られたくない、恥ずかしくなる、ゆるゆるの、ウンチ。水っぽくて臭い、びちびちのウンチ。便器を汚す、下痢ウンチ。お腹を下しちゃった汚いウンチ。

心臓が脈拍するたびに、痛む。私は悲しい気持ちになっていた。

同じ個室に入れてくれないのはしょうがない。きっと家族や将来の旦那様にだつて同室を許すはずがないことだから。でも、学校で一番信頼されていて、赤裸々な話をしてくれる私にすら、直接的にお腹が下っているって教えてくれなかった。

母親になら、お腹を壊した、下痢をしてるって相談することはあるかもしれない。でも私はセンパイのオ○ニーのことだつて知ってる。「友達にも内緒なんだけどね、オモチャ、使ってるの」って耳まで炎の色に染めて耳元で囁いてくれたことは、忘れられない。親には絶対バレたくないはずのひとり遊びのことも、教えてもらえるのに、

お腹の具合のことは、遠ざけられてる。

「どうして。どうして。どうして」

気兼ねなく不調を訴えてくれて、気を遣うことなくウンチをしてほしい。きつと今センパイは指定席の奥の個室でトイレの外を気にしながら、私を待たせまいと必死に踏ん張ってる。長引いてひどい具合だと思われたくなくて、息みと恥じらいで顔を赤くしてる。本当は校舎の洋式トイレでゆっくりしたいはずなのに、早朝に誰かがトイレに来る低い可能性を気にして、人気のない部室棟トイレの和式便器でびちびちの便を散らしている。

「センパイの下痢ウンチ、見たい。見たい……っ！」

見たい。今すぐ部室棟女子トイレに忍び寄って、こっそり隙間から覗き見たい。便の具合、臭い、息み声、お尻を拭く回数。全部、知りたい。想像するだけで、喉が渴く。妄想しただけで、股間が濡れる。本能に抗えなくて、潤った淫裂をなぞってしま

う。
人並みに大便が恥ずかしくて、でも我慢ができないから仄めかして、急いで済ませる思春期の排便が見たい。

一緒にいるのが私じゃなくて友達が後輩だったら、嘘をついてトイレに走ってたかもしれない。それこそポーチを手にナプキンつけてくるって、先に走ってと遠ざ

けて時間を稼いでいるかもしれない。信頼のある私だから、大きい方をしてくるって教えてくれるけど。お腹の具合が悪いと、腹を下したウンチをすることは、言ってくれない。

どうして今日に限って、盗撮してないんだらう。

もう隠し撮りをやめると決意したことなんか、どうでもよくなっていた。

「ごめんねハルちゃんお待たせっ。さあ走ろっか！」

あまりにも長い、五分間だった。トイレに忍び寄ろうか、このまま妄想に身を委ねて慰めに浸ろうかと悶絶しているところで、センパイがトイレから戻ってきた。

「このまま朝練して大丈夫ですか？」

「別になんでもないからっ、だいじょうぶだいじょうぶ」

強く踏ん張っていたのか、恥ずかしいのかセンパイの頬は赤く染まっていた。早口気味にグラウンドに誘う声音は、上ずっている。

「貴重な時間浪費しちゃったから、早くしないと」

「センパイ、その、お腹の具合、……悪いんですよね？」

「ううん、ちょっと急にしたくなっただけっ。これで朝練後にしたくならなくて済むかな？」

嘘だ。一刻も早くトイレを飛び出したかったのに、便器からお尻を離せなかった時

間はごまかせない。

追求したい。下痢ですよね？ びちびちなんですか？ って。

「そうですか。じゃあ、朝練しましょう！」

気を遣うことはできた。だけど休みましようって、具合を案ずることは、できなかった。ううん、しなかった。

このまま朝練が中断になったらセンパイは私から離れるために、教室に行つてしまふかもしれない。そしてまた催したときに、わざわざ遠い部室棟トイレまで来る？ わからない。

センパイが下痢のウンチをしているところが、見たい。

「すぐ着替えるから、外で待っててっ」

だけど壁の隙間から覗き見たらその場で興奮を抑えられない。

「慌てなくていいですよ。あ、私もトイレ済ませてきますね」

盗撮、しなくちゃ。カメラでセンパイの痴態を、収めなきゃ。

「あ、待ってっ、さっきトイレ大丈夫って言ってなかった？」

「ほんとはおしっこしたかったんですけど、言いづらくて」

「あ、まだ臭う、かもしれないし校舎の方行つてほしい、かも？」

でも。だめ。盗撮はもう、やめるって。やめないと。

「大のときにトイレに誘うセンパイが変なこと言いますね？」

三年生最後の大会まであと僅か。朝練できるのも、あと、少し。

「そ、それはそうだけど。あ、奥の個室使っちゃだめだからね？」

センパイのウンチが、見たい。

「わかってますって。えっと、朝おしっこしてなくて時間かかるんで、ゆっくり着替えてください」

嘘だ。

部室を出て、駆け足でトイレを目指す。

この世界にあるのは私の心音だけ。爆ぜる、鼓動。血液が急沸騰して、脳が茹だりそうだった。

何も考えられない。正しいだとか、悪いだとか、理解ができない。

ただ本能のままに。もうこれつきり、最後にしますからと誰かに懺悔して。巧妙に隠したカメラを引っ張り出し、最短最速で仕掛け、電源を入れた。

「お待たせしましたっ。じゃあ、朝練がんばりましょう！」

もう戻れない。私の代わりの機械の目は、動いてしまっている。

トイレに何も臭いが残っていなかったおかげで、私はいつも通り走れている。痕跡があったら、今頃性欲に溺れていただろうか。

早く見たい。センパイの下痢。

お願いですから、もう一度だけ、下してください。

センパイの隠したくなる痴態を拝むことができたなら、もう二度としませんから。



あつという間で、気の遠くなる四〇分だった。

準備運動、柔軟体操、ランニング。いつもすぐに終わってしまうひとときが、延々と伸ばされたように感じられた。楽しいことはすぐに終わるといふけれど、閾値を超えると時間感覚は狂うのかもしれない。

無防備にふりふりされるセンパイのお尻は、何度眺めても飽きることはない。ハイフパンツとショーツ、たった二枚の布地に隠された引き締まった臀部の更に奥、尻の肉に埋もれた、肛門。

センパイがウンチをするときに曝け出す、穴。

朝練前に下痢を吐き出した排泄腔が、目の前にあった。柔軟体操でセンパイの背を押して伸ばしているとき、顔のすぐ前に。ランニングでわざと速度を緩めたとき、見下ろせる場所に。

消化機能を果たせない腸管を揺らし、未消化の排泄物を抱えたまま、センパイはいつも通りに走り込む。きつと下痢をしていたことを気づかれまいと、気丈に。下痢が恥ずかしいから、何も無いフリをする。きつと誰を前にしても同じ振る舞いをするんですよね。

悔しい。

「ふう、いい汗かいたねハルちゃん」

「そうですね」

さりげなくセンパイの挙動を監視しながら、部室に戻る。

右手がお腹の上にある。時折歩速を落として、お尻を締めている。

センパイ、お腹が痛いんだ。ウンチ、したいんですよね。

どれだけ平静を装ったって腹痛やウンチがしたくなるのは、我慢できないんだ。私がそばにいるから、すぐトイレに行けない。

これから部室でスポーツバッグを取って、体育館横のシャワー室に行く。シャワーさえ浴びたら部室で解散だけど、それまでお腹が痛いのが我慢ができるのかな。漏れそうになって、シャワーの途中で体育館のトイレに駆け込むのかな。さすがにバスタオルを巻いて飛び出すわけにはいかないから、急いで制服を纏う？ そうしたら、もうバレバレだよね。きれいだけど誰か来るかもしれないトイレで妥協して、私が近寄る

かもしれないと急いで踏ん張って。

どこにでもいる、下痢に羞恥する水平彼方になっちゃうんだ。私にですら下した腹事情を知られたくない、一人の女子に。

「センパイ、先にシャワー浴びに行きますね」

「ええと、どうしたの？」

「今日数学の小テストあるんですよ。昨日全然復習やってなくて。早めに教室行って勉強したいんです」

「あ……そうなんだ」

「センパイはゆっくりしていいですよ」

朝練が終わったからってすぐ汗を流しに行くことはなく、水分補給や靴の履き替えで数分は部室で過ごす。でも用事があるってことでいち早く部室を抜けることができれば、シャワー室に行く装えば。

部室を出て、シャワー室のある体育館とは反対側、校舎への通路に向かい物陰に身を隠す。数十秒後、部室からセンパイが出てきた。シャワーを浴びるためのタオルや着替えの入ったバッグを持っていない。ということとは。

「センパイ、もしかして」

辺りを見渡し、部室棟トイレの方に走っていった！

そうだよね、お腹痛いんですよね、下痢のウンチ、したいんですもんね。他の生徒のいるかもしれない校舎のきれいなトイレじゃなくて、誰も近寄らない、朝は用事のない部室棟の汚い和式便器で気兼ねなくウンチ、するんですよ。

今からセンパイが下痢、するんだ。薄暗いトイレの一番奥、指定席になった狭い個室で。音と臭いと人の気配に敏感になる心配もなく、私がいるはずのない空間で、ぶりぶり、びちびちって。

気になる私がないことに安心して、我慢してたびちびちウンチをするために、人気のない部室棟トイレに行った！

そこに私はいないので安心して、すっきりしてくださいね。

でもごめんなさい、卑怯者の瞳がセンパイを見てしまいます。

「ごめんなさい、センパイ。どうしても我慢、できなくて」

今日で最後。何度も繰り返し、抑えられなくて、後悔して。

でもこれで本当の本当に最後にします。やっちゃいけないってわかっているから。私にすら見せられない、告白できない下痢をする姿を隠し撮りして、もうやめます。

多分今トイレの中に入った。当然無人のトイレ内を見渡して、一直線に奥の個室に飛び込んだ。鍵をかけて、汚れた便器をまたいで、ハーフパンツとショーツを同時に下ろしつつしゃがんで、出したいのを堪えて一歩前に踏み出して、そして。

「ああセンパイ、いまウンチしてるんだ。下痢の、ウンチ……!!」

覗き見たい。砂だらけのタイルに這いつくばって、ドアの隙間から。でも興奮のあまりドアを壊しちゃうかもしれないので、盗撮で我慢しますね。

「シャワー、浴びに行こう」

無意識に、股間をまさぐっていた。このまま隠れていてもできることはない。センパイにはシャワーを浴びると言ったのだから、汗を流しておかなきゃ。早く、きれいになって、それで。

「センパイが入れ替わりでシャワーしてる間にオ○ニー、しちゃお」

我慢なんてできるわけがない。センパイの残した匂いの消えない内に、隠し撮りの映像を見ながら、したい……っ！ そのためにはすぐにシャワーを浴びて着替えて、準備しなきゃ！

逸る。躓きそうになりながら、駆ける。息が苦しいのは走っているせい、それとも未知の興奮で心臓が壊れそうだから？

センパイがウンチ終わるのにどれだけかかるかな。下痢だもんね、今日で二回目ってことはまだまだいっぱい出るよね、もしかしてお家でも一回出してきたかな。短時間に三回もウンチだったらもう水みたいなの、すっごいお腹が渋って一〇分近くしゃがんでないと動けないんじゃないかな。あのカツコイイセンパイが、ウンチ止ま

らなくて顔を真っ赤にして踏ん張ってるの……撮れてるかなあ。

「早く、早く……っ」

罪の重さは手のひらの中でくるくる変わる。私の足取りより軽い、とても軽い。今からする悪いことを引き留める重りになんて到底ならない。

悪いことだつてわかってるんです。盗撮は大好きなセンパイを傷つける、最低の行為だ。やめないといけないこと、今すぐにもセンパイのところに行つて、録画を止めるべき――

「センパイの、下痢ウンチ……!」

頭がふわつとしている。熱でどうにかかなりそうだった。

シャワー室に入ると、珍しくシャワーブースが二つ埋まっていた。大会前のどこかの部員が朝練でもしていたのかな。滅多にいないのにね。まあどうでもいいや。

昼む時間ももつたいないので脱いだそばからカゴに放り込んでいく。あ、シヨーツの中ちよつと濡れちゃってる。早くオ○ニーしたい、でもきれいなカラダにしてからね、センパイにも先にシャワーって言っちゃったし、怪しまれないようにね。

空いているブースに入り、あたたかい水を浴びる。こうやって貴重な時間を浪費している間にもセンパイはウンチしてるんだ、はあ。

くちゅ くちゅ

「ん……っ♡」

今センパイが苦しそうな顔で気張っているのを想像すると、くらくらして、触りたくなる、っ。

流したそばから、濡れていく。降り注ぐ温水では立たないような粘度の高い液体の、攪拌される音が響く。ん、だめ、隣に誰かがいるのに触っちゃ、我慢、トイレまで……え。

一時的な快楽を振り切り、カラスの行水を済ませてさっさと身体を拭いていく。ん、お股がぬるぬるしてる、早く気持ちよくなりたくて、もう汚れちゃった。

「あ、ハルちゃん。もうシャワー浴び終わったの？」

「センパイっ!？」

まだトイレで呻いてると思ってたセンパイがシャワー室に来て心臓が軋む。とっさにタオルで股間を隠し、笑顔を作る。

「そんなにびっくりしてどうしたの？ それになんで隠すのかな」

「え、いや、なんでも……あはは」

センパイに裸を隠すような仲じゃないけど、今はだめ、だって、濡れてるっ。肌はまだ湿っぽいけど慌ててショーツを穿き上げる。

「まあいつか。さくて私もさっぱりしよっつと」

センパイは空いたロッカーに鞆とスポーツツバグを詰め、先にタオルと制服を出して汗を流す準備をしている。鞆を持ってきたってことは部屋には戻らないよね。

これからシャワー浴びてたらセンパイのペースなら一〇分はかかる、ううん、もう少し。早く、オ○ニー、したいよね。

朝に我慢できなくてシチャうときは一緒にシャワーを浴びた後、こっそり部屋棟トイレに行つてするんだけど……。今日は今すぐにしたい、下痢の臭いが残っている内に、気持ちいいの、動画見ながら、くちゅくちゅ。はああ。

急いで制服に袖を通しながら、悠長に脱いでいるセンパイを見る。平然としてるけど、今さっきまでウンチしてたセンパイ。いつもの健康そうなバナナウンチじゃなくて、具合の悪い下痢のウンチを出してたセンパイのお尻が、すぐそこにある。もしかしたらお尻に飛沫がついてるかも、ショーツに茶色いシミがあったりして。

センパイがショーツ脱いだときにじゃれつくフリをして確認したい。だけど怪しまれるし、今日は我慢。早くトイレに行つて、時間の限り、気持ちいいことがしたい。

「さっぱりしたあ。センパイっ、私行きますね」

「うん。またね」

センパイがまだ上着を脱いでいるのを見届けてシャワー室を飛び出た。まだ脱ぎきつてもないなら、時間はたっぷり。万が一便意を催して、人目を気にして部屋棟ト

イレに来るとしても、着替えや移動を考慮しても充分に猶予はある。もしセンパイと鉢合わせても、ウンチしたくなつて部室棟トイレでしてた、つてごまかせる。校舎のトイレで大きい方は恥ずかしいってずっと振る舞い続けてたから、言い訳しても怪しまれない。

走る。この日のために陸上を続けてたのかとすら思える、軽快な全速力。いったん部室に入り、鞆とスポーツバッグを置いてスマホとワイヤレスイヤホンを取り出す。

早く、早く。センパイがトイレを終えてからもう何分経つただろう。一刻も早くトイレに行かないと匂いが、大好きなセンパイのすごくいい匂いが消えちゃう。映像じゃ決して残らない、リアルな下痢の匂いは、今しか味わえないのだから。

ああセンパイの下したお腹の匂いって、どんな感じなのかなあ。食べたものの匂い？ 消化液の酸っぱい刺激臭？

もうだめだ。まだトイレに着いていないのに頭がねじれて切れそうになる。走りながら制服のスカート越しに淫裂をなぞる。ああ痒い、シヨーツの上からなぞる程度じゃ搔痒は収まらない。搔けば搔くほど苛立ちだけが毛羽立って、熱があふれる。痒い。かゆい。

文化祭を控えた生徒会室は、慌ただしい雰囲気にもまれていた。

「あの、生徒会長、ちょっと教えてほしいことがあるんですけど」

生徒会室、一年生の役員が一人の女子の元に駆け寄っていく。

「この書類の仕舞うところがわからなくて」

「あ、これはね」

彼女——生徒会長の七海は立ち上がり、役員の子と一緒に書類棚のところまで出向いていく。そんなの書類棚を指差し、背表紙のファイル名を伝えれば終わる話なのに。

「日付の順番に綴じてね。それとこの書類はばっちりだけど、たまにここの箇所が書かれていないときがあるから、受け取る前に確認しておくといいわ」

収納場所から、綴じる順番と注意点まで丁寧に優しく教えていた。

「柑子木さん、少しいい？」

次は同じ二年生の子が質問をしていた。その後ろにはさつき生徒会室を訪れた男子が並び、順番を待っている。

「あ、ごめんね、もう少し待ってくれるかしら」

「いいわよ七海——私が見るから」

なんでみんな七海に聞きたがるんだろう。私、空いてるんだけどな。

「さすが副会長。じゃあ八坂さん、お願いね」

私が代わりに対応した男子が差し出したのは、部の模擬店の申請書だった。

「ここ、書き漏らしがあるわ。書いてから、出し直して」

ちよつと機嫌が悪いみたいなの対応をしてしまった。隠す努力をしないと、みんな頼りづらいわよね。

嘆息し、自分の席に座る。役員の質問に答え終わった七海と、目が合った。七海は私の顔を見るやそつと寄ってきて、

「愛・依・ち・ゃ・ん、疲れてる？」

と耳打ち。

「別に——がんばって、終わらせましょう」

「もう、隠さなくていいのに。うん、がんばろつか！」

自席に戻ろうとした七海が立ち止まり、太ももを擦り合わせたのが見えた。

「でもやつぱり疲れたかも。休憩しようかな。トイレ行くけど、七海は大丈夫？」

「ん、じゃあ、お手洗い、行こうかな」

他の役員に離席を告げ、二人で廊下に出る。

「……七海、我慢してたでしょ」

「あ、うん、もう少してキリのいいところだったし。それにみんな頼ってくれるからちゃんと応えてあげないと」

「あんまり我慢しちゃだめよ。でもつらかったら私を呼んでね」

「大丈夫だって。ちゃんと一人でトイレくらい行けるから」

文化祭の準備で放課後なのに生徒が行き交って賑わっていたが、最寄りの女子トイレは無人だった。先に歩いていて私が一番手前の個室に入ると、どこも空いているのに七海は隣の個室に入った。

生徒会室に来る前に用を足していたので少量のおしっこを絞り出し、先に巻き取っていたペーパーで水分を拭き取ってさつと着衣を整える。七海はそれなりに我慢していたらしく、私が水を流すときもじよろじよろと耳心地のいい音を立てていた。私が個室を出たところで勢いは弱まり、水面を打つ水音は止んでいった。誰もいないし、ちよつとからかっちゃおうかな。

「七海、けっこう我慢してたんだね」

「うん……あ、待って。もう出るから」

「もう出る？　もしかして、ウンチもしてるの？」

「ち、違うわっ。お手洗いのことっ！」

「冗談だつて」

慌てて髪を巻き取る七海。他の誰かが来るかもしれないのに恥ずかしい方のことを聞かれて、顔を赤くしてるのかな。見えないけど。

「したかったら、いいよ。今誰もいないし、待つてあげる」

「あー、もう愛依ちゃんつてば……ううん、大丈夫。今は大きい方、したくないから」

「もー心配しすぎ。したくなつたらちゃんとして……ううん、なんでもない」

水を流しトイレから出てきた七海がお待たせ、と言つて笑つた。

その笑顔は友達に見せるものとは違う色。朗らかに、自由に、伸び伸びと咲く、橙色の花。

「じゃあ、戻ろっか」

私だけに見せてくれる、本当の七海の顔。

私は腹が立っている。

七海ななみは優秀で美人で模範生で、とつてもいい子。

偏差値も普遍的な公立中学校から県内有数の進学校に合格した。血の滲むような

努力を私は知っている。けど七海は表情にも態度にも一切出さないから学校の誰も
が天才だ才能だとおだてている。

誰も七海努力を知らない。自宅すれば勉強漬け、休日も遊ぶ暇はなく家に縛り付
けられ、母親に怯えながら机にかじりついているなんて私か七海が言わない限り、誰
も知ることがない。

七海は校内で最も告白の類いを受け取った女子だろう。女子も羨む美貌でいつも
普段のケアについて尋ねられていた。顔つきこそ生まれつきのものはあるとして、七
海の見た目は母親によって管理されている。中学生の身に余る高級化粧品で飾られ
維持され研ぎ澄まされて、将来の武器として磨かれている。本人の意思を無視したお
しゃれに私は価値を感じない。

中学校で彼女は生徒会長を務めた。学年トップで運動もできて積極的に行事など
で準備や人の嫌がる作業をして。七海を嫌う生徒なんて数える程度しかいなかった
だろうし、先生たちだってクラスの運営で逆に頼ることだってあった。そんな七海が
生徒会長として推薦され、対立する候補が辞退するのもおかしくはない。だけど七海
はみんなが勧めるから、母親が内申で有利になるからと強制したから生徒の代表に
なっただけ。ほんの一言、私にだけ漏らした弱音の重さを指先程度でも肩代わりでき
る人なんて、どこにもいなかった。

七海はいい子。みんながそう願うから、いい子になった。私は腹が立っている。

とつてもいい子の七海ちゃん。みんなに望まれて、重くて粘つく白粉で優等生を演じている。あなたが化粧を落とすのは、二人きりの私の前だけ。

私は腹が立っている。私にできるのはすっぴんの七海を受け止め、抱きしめ、愛してあげることだけ。七海が自分らしくなれるお手伝いはできない。母親の呪縛から解き放つ力もない。

だから私は、七海が七海でいられる場所においてあげる。

本音も言えない、きれいで汚点のない優等生を演じる七海ちゃん。でも私の前でだけは、甘えん坊ななみになっていいんだよ。

本当の柑子木こうしき七海は私だけが知る。私だけの、七海。

だから私だけが、八坂愛依やさかあいだけがあなたを愛してあげられる。



おろしたてのカーディガンを羽織る、一〇月。夜に雨が降って冷え込みは厳しく、

道路は暗く濡れている。

平日の朝は、七海を自宅まで迎えに行くことから始まる。

もうお互い子供じゃないから、別にいいよ……と拒んでいた七海も、いつしか何も言わなくなり、むしろ迎えに行かなければ数日の内に懇願するようになった。

いい傾向、だと思ふ。

高校生だからとかそういう世間体に左右されず、私と登校することができる。んー、登校はおまけなのかな。私在家まで来てくれることが重要なだけかも。それでもいいけどね。

私が求められている内は、七海は七海でいられる。

七時三〇分、時間通りにインターホンを鳴らす。一分弱、静寂の中で待つ。

「おはよう、七海」

「愛依ちゃん、おはよう」

解錠し、ドアを開けたのは制服に着替えた七海。両親が出てくることは滅多にない。国家公務員の父親も、とある大手企業に勤める母親も、この時間は既に入社しているもしくは帰ってきていない。

根元から毛先まで艶めき冬風に撫でられて羽のように舞う黒い髪。指の間に通せば至上の肌触りで零れていく繊細な涙は、見た者の記憶に刻まれる極上の煌めきを

放っている。

校則で過度なメイクは禁じられているためナチュラルメイクが当校女子のおしゃれなのだけど、七海はすっぴんだ。二〇代と嘯いても通用する高校生の母をして、この娘。年相応ならぬ大人びた顔立ちだが決して老けているとは言われない。

鋭くも柔和な優しさが内在する相貌に柳の眉が伸びる。だけど、宝石の瞳の下には黒ずんだくまができていた。

「……目の下に、くまができてる。また、夜更かし？」

「もう少しで模試だから。数学、もう落とせないし」

「うん、うん。でも七海なら大丈夫だよ。たまには休もうね」

きつと私でなくてクラスメイト相手だったら、弱音を吐くことなんてない。こういう何気ない気の緩みを、私は歓迎する。溜まる一方では、苦しいだけだから。

あ、溜まるといえば、そろそろかな。

「でも身体は大事にね？ 調子を悪くして模試に出られなかったら意味ないんだから」

「気をつけるね。あ、それでね、あの、」

「じゃあ学校行こっか」

手を差し伸べる。しかし七海は手を取るでもなく、うつむいて私の指先を見つめて

いた。明るく出迎えてくれた七海だが登校しようとする誘うと途端に顔色を曇らせ、もしも指遊びを始めた。

かっこいい生徒会長として背を伸ばし堂々と闊歩する優等生からは想像できない、弱々しい姿だった。

「どうしたの？ 着替えてるし、もう準備できてるよね」

「あ、あのね」

凜という単語が最も似合う彼女が、細くすらっと伸びる指同士を、もどかしく絡めさせている。その姿は言いたいことがあるのに、言葉にする勇気が出ない子供のよう。気づいてほしい、言えない自分の代わりに、言ってみてほしい。

そうなんでしょう、七海。

「学校、行かないの？ もしかして行きたくない？」

「そうじゃないのっ。えっとね」

ああ、ずるいな。高身長の人々が上目遣いで見つめてきたら私の方から言っちゃいたくなる。人前では絶対に見せないであろう、小さくて潤んだ瞳。

時間に厳しい七海が玄関で待つてなくて、一分ほどして迎えてくれたのも、やっぱりそうなんだと実感する。

母親のお下がりのコートが玄関のコートハンガーにぶら下がったままのもの、

さっきまであることをしていたから。

「何か、したいことがあるの？」

「……」

「言わないと、わからないよ」

「えつとね、私、ね……お手洗い、行きたい」

「まだ済ませてなかったの？」

「おしっこはしたの。さっきまで大きい方、してて……」

「途中で出てきてくれたの？ 別に外で待ってたのに」

「だって愛依ちゃんが来てくれたから……それでね、あのね」

「なあに？」

「お、大きい方、するから、お手洗い、」

「二人きりのときはほかなさいでいいのよ？」

「あ、うん。じゃあ、あの、ね——。うんちっ。」

「うんちするからおトイレ、着いてきて、くれる……?」

「うん、いいよ」

「やっぱり七海、ウンチがしたかったんだ。」

「そうだよ、最後にお家でうんちしてしてから、もう四日かな。そろそろ、したく

なる頃だよ。便意がなくてもすつきりしてから学校に行きたいよね。朝ご飯の後にしたくなったら、学校で催さないようにお家でウンチ、したいよね。

さつきまで、私に来るまでトイレでがんばってたのかな。でもインターホンが鳴って、しようがなくトイレから出てきた。ううん、私に来たから、呼ぶために急いで出てきた。

靴を脱ぎ、制服の袖を引っ張られながらトイレに着いた。

柑子木家に一カ所だけの、洋式便器。

「もう何日、出てないのかな」

「四日、くらい」

「じゃあ月曜日の朝と一緒にしてから、出てないんだ。それまで全然、したくならなかった？」

「ううん、ちょっとだけ、したかった、でも、出なくて」

「じゃあがんばらないとね。でも出なかったら、学校でしないとね」

「だめ、それはやだ……!」

七海はお家でしかウンチができない。

気持ちわかるよ。お店とか公園とか、そういう不特定多数の使う場所で大きい方って、しづらいよね。特に学校は友達が同じトイレを使うから気を遣うし、音や臭

いでバレルから我慢しちゃうよね。私は朝に自宅で済ませるからいいけれど、七海は毎朝出ないしお便秘さんだから学校でしたくなったら……大変だね。

「学校でウンチするの、やだ？」

「やだ……っ」

「じゃあ、お家でウンチできるように、がんばろうね」

「うん……！」

私も学校で大きい方をするのは、やだな。女子はみんな、そうだよ。でも私は便意が強かったりお腹が痛くなったりしてつらいときは、ちゃんとトイレに行けるけどね。我慢は大変だし万が一失敗したら恥ずかしいどころじゃ、ないもの。

でも七海は学校でウンチ、できないからしようがないよね。がんばってお家で済ませて、できるだけ催さないように努力しないとね。それでもお腹が痛くなっちゃったら、学校でしないといけないのに、七海は我慢しちゃう。小学生のときみたいにみんなの前で漏らしたり、中学生のときもお腹を壊して間に合わなかったりしたのは、つらかったよね。あんなに恥ずかしい思いをしたのに勇気が出ない七海ちゃん。

私がいないとウンチができない、七海ちゃん。

学校でウンチをして、恥ずかしい思いをするのは嫌だよ。あの生徒会長が、美人の先輩が学校でウンチしてるからって誰も嫌わないし、悪口も言わないと思うよ。

「だけどそうやって七海が人目を気にして、私を頼ってくれている内は、私が助けてあげる。」

「じゃあおトイレ、するね。どこかに行っちゃだよ」

ドアを全開にして、トイレに入っていく。私の目を気にせずするとショーツを足元まで降ろし、深くまで便座に腰掛ける。スカートを丸めて足をちよつとだけ開く。最低限整えただけの陰毛から陰唇のめくれた恥部まで晒し出し、じつと私を見上げてくる。

「うんちするから、見せて……」

「いいよ。七海、がんばってね」

「ん……」

ぎゅつと握った両手を膝に置き、七海は息みだす。

かわいいね、七海。

みんなが見惚れる美人な生徒会長眼を瞑って息んでる。子供みたいに一生懸命に、ウンチを出そうとがんばってる。

たった一枚のドアで遮られるべき、乙女のプライベート。おしっこはもちろん、ウンチだつて見られたくない。みんながするのに、みんなが隠す汚いところ。

「ウンチは出そう？」

「ちよつとしたい感じ、ある、けどまだ出ない」

「ちゃんと息まないと、ウンチ出ないよ？」

「うん……」

息を吸い、重心を落として再び息む。大人顔負けのモデル体型の女の子がお腹に力を込め、上から下に踏ん張っている姿は何度見たつてどきどきする。

七海がウンチしてる。男子の一部は七海はウンチなんかしないとか思つてそうだよね。七海はこまめにトイレに行きたがらないし、水分摂取も控えて学校での排泄を抑えているから一層アイドルめいたイメージが浸透してるかも。

「ん……ふ。んっ」

息継ぎと息みはじめの小さな声が二人だけの家に染みて消える。七海がトイレに入ったときに換気扇は切ったから、とても静か。

「はぁ」

皺のない細くきれいな手でお腹を撫でている。ウンチが出ますようになってお願いを込めた、時計回り。

「ウンチ、出ない？」

「うん……」

「ちゃんとうーんって声出さないと、出ないよ」

「そう、かな」

あれ。

「どうしたの？ いつもみたいにうーんってしないと、ウンチ出ないんじゃない？」
「だって……他の子は声出してうんち、してないから。だから、静かに踏ん張った方が、でるかも、って」

途切れ途切れにたどたどしく言葉を紡ぐ。目線は左右に移ろい、声は小さい。両膝に置いていた手を解き、都合が悪いときの癖で指遊びもしている。

学校にいるときの、姿勢がよくてはきはきと受け答えをする生徒会長の姿はどこにもない。責められた子供が言い訳じみて反論をするようにしか見えなくて、それがかわいくて。

「ふうん。じゃあ、静かに踏ん張れば、いいんじゃない」

「え、うん」

姿勢を整えて再び、息む。耳を澄ますとお腹に力を込める声は聞こえるけど、いつもウンチをするときみたいにかわいくて一生懸命な息み声を出す様子はない。

「声を出してウンチするの、恥ずかしい？」

「だって、この前学校でうんちしてたときにお腹痛くてうーんってしてたら、他の子に笑われたから……」

七海が理由に挙げたのは先週のお腹がゆるくなって、学校でウンチしたときのことかな。昼食後辺りから催して、六時間目の途中でお腹が痛くなって、放課後になって脂汗をかいて机でじっとしてた七海を、私はトイレに連れて行ってあげた。

遠くのトイレに行きたがる七海を「生徒会室に近いところは役員がもう来てるよ」「体育館のトイレがいい？ 部活を始める生徒で混んでるかも」「他の階にする？ 生徒会長が他学年のトイレでウンチしてたら、恥ずかしいよね」と耳元で囁き続け、教室に近いトイレに誘導したの。

学校でウンチができない七海ちゃん。だけど我慢ができなくて、生徒会のお仕事があるからお家にも帰れない。ウンチのために嘘をついて下校はできない真面目な七海ちゃん。

だから人の来ないトイレに行きたがる七海ちゃん。

でも七海は、私が着いていてあげないと学校ではウンチができない。

『トイレの邪魔をして、ごめんね。私先に生徒会室行くから、後で合流しようね』
いじわるに言ったらとてもびっくりした顔で、涙目になって袖を掴んできて。みんな見てるのに、私の前だけの七海になって。

『だめ、あの、うんちしたいから、おねがい、一緒にいて』

あのときの七海、すつごくかわいかった。人目があるから写真を撮れなかったのが、残念だったなあ。

一番奥の個室に入って、人気がなくなるまで我慢して、静かになつたら水を流しながらウンチして。私が隣の個室にいたから安心してう〜んって息んでたら、入ってきた子に『うわ、子供みたい』って言われちゃったね。

それからはお尻を閉じてじつと黙って、その子がいなくなるまでウンチを我慢してたね。油断して声が出ちゃって、恥ずかしかったんだ。でも耐えられなくてゆるいのをちびつた音が響いたの、私はばっちり聞いてたよ。

「あのときの話ね。うんうん、恥ずかしかったよね。でもがんばってう〜んってしてたのを笑うなんて、ひどい子だよね」

「だから、静かにうんちできるようにならなきゃ、って……」

学校じゃ一人でウンチができないの？ だめだめ、そんなこと行言っちゃったら七海が傷ついちゃうかな。

「ここは学校じゃないよね。七海のお家だよ？ 誰も七海がう〜んってしてても悪口、言わないよ」

「でも……」

「それじゃあ、黙ってウンチできるように、がんばってみる？」

「がんばって、みたい」

「そう。じゃあ、がんばって」

なんか、イラっとしちゃったな。こんなにそっぽ向かれるの、久しぶりかも。

再三七海はお腹をへこませて息んでいる。精一杯、顔を赤くして踏ん張って、ウンチを出そうとしてがんばってる。

声を出さないように口を閉じている七海を眺めて、一分くらい。ウンチの欠片すら落ちないし、便器の水面を打つのはちよびつとだけ出てきたおしつこの雫くらい。

「ん、っ……ふうう、ん……はぁ」

ふうっ

成果はウンチが詰まった直腸から漏れた、情けないおならの音だけだった。

「どうしよう、うんち、出ないよお」

「あーもうちよつとで時間かな」スマホを眺め、わざとらしく。

「待ってっ、もうちよつとで、出るから」

「早くウンチをしないと、遅刻しちゃうよ。生徒会長がウンチ出なくて遅刻なんて、恥ずかしいね」

「だいじょうぶ、ちゃんと、出るから」

「ウンチ出ないなら、諦めて学校行こうよ」

「やだ、だめ。学校でしたくなるの、やだ……っ」

「じゃあ、うーんってしようよ。七海はうーんってしないと、ウンチが出ないんだよね？」

「でも……」

「じゃあウンチが出るまで静かに踏ん張る？ 出るまでずっとトイレにいる？ 私は遅刻したくないから、先に行っちゃおうよ」

「うあ、や、愛依ちゃん……っ！」

ついに七海は目元に涙を滲ませて、上目遣いで私を見つめた。

子供だ。小学三年生くらいなの、泣き虫だった七海。

みんなの前では凜として、私の前だけでは九歳に戻っちゃう、七海ちゃん。

「ウンチ、したいよね」

「したい」

「ちゃんとお家でウンチして、スッキリして学校行きたいよね」

「ぜっつたいに学校でうんち、したくないっ」

「じゃあ、どうするの」

「ちゃんと、うーんって、する……」

「七海ちゃんは声を出してうーんって、できるかな？」

「できるっ」

「ふふ。七海は、えらいね。じゃあ、うーんって、しよ」

愛おしすぎて七海の頭を撫でてあげる。さらりと手のひらを走るシルクのような肌触り。七海はふにゃあ、と頬を緩ませて頭をぐりぐりと押しつけてくる。

「あいちゃん……ちゃんとうーんってするから、待っててくれる？ ななみがうんちするところ、見ててくれる？」

「いいよ。七海ちゃん、ウンチ、がんばろうね」

「うん！」

しよわわ……と尿道もゆるませて、

「う……んっ。うーん……！」

切ない声音で、息み出した。

「うーん、ん、ん……。はあ、っ、うーんっ、うーんっ！」

「はあっ、いいよ、七海、そう、がんばって、え」

あとがき

サンクリーのプチョンリー「すか天」に参加するにあたって、電子版で既に配信していた毎朝快便ガール小説誌『朝のむずむずとおなかのもやもや』の紙の本だけでなく、何か一冊作ろうと思ひまして。

恐らく八年ぶりくらいに、個人誌を作りました。

その個人誌も初めて作った同人誌で、空白期間も含めれば十六冊くらいずっと、いわゆる合同誌形式でした。

こういうのも、新鮮です。

そもそもあとがきも久しぶりで、決まって入稿の直前にキーボードを叩いてその場で作っていました。いまも、そうです。

テーマについて。

スカトロと背徳行為を掛け合わせたテーマになっています。スカトロ自体が既にインモラルな性癖で、更に盗撮だの同性愛だとか……実はスカジャンルでは当たり前のものでですけど、強調して書いてみたものをまとめてみました。

・表紙作品、遙か彼方シリーズ。

以前 *print* で投稿した『遙か彼方、手の届く距離にあるもの』のリメイク及び続編になります。

あのときは一万文字に収めるため凝縮して、続きを意識しなかった短編でしたが、コメントや感想で「先輩が盗撮している」「ホラーだ」と言われ続け、別にそういうつもり描写じゃなかったんですけど、背徳スカを書くにあたって続きを作りました。これでいいですか？

・ガーリツシユハートエイク

これは投稿作品『6年1組。雪が降り、崩れる日』内の七海と愛というキャラのリメイク&続きです。具体的には別物です。本当はリメイク分を中学生に書き直して掲載する予定でしたが紙幅と時間~~と~~がなかったため、こういう形で。キャプションでも書きました名前があくまで想定年代の命名ランキングを順に当てた結果、なので。

どっちも百合スカかつ、実は大好きな「声を出してうんちする」要素を入れました。好評ならもつと書きます。樹里ちゃんとか。

あと本当ならもつと背徳要素のある『淑女ノ不文律』の続きも入れる予定だったのですが紙幅と時間以下略で。これはいずれ。

表紙はずっと気になっていた友屋勘九郎先生にお願いし、すごくヤバイ盗撮和式絵を描いていただきました。本当にありがとございます。この表紙の設定、遙か彼方々の一話だけしか読んでないと作中と矛盾しているんですね、最後まで読んだらわかると思います。

最後に。実は背徳云々からサブタイ、表紙デザインの一部はとある同人誌をリスベクトして作りました。まあ作者に届くはずはないので、わかったらリプしてください。余ると思っていた文字数が埋まりそうなので、ここまで。もし最後まで読んでいただけ、響く作品がありましたらぜひ感想をくださいませ。主にやる気が出ます。では。

電子版発行時追記／

サンクリ中止発表前の入稿だったため、サンクリ開催を想定したあとがきとなっておりますが、原文ままで掲載となっております。

もちづきうずめ

Twitter : @scuzume_at

「見られないからこそ、見たくなる」

女の子の“排泄”という、あたりまえの日常なのに絶対に見られてはいけない、見ることのできないシーンをこっそりと覗いてしまうという背徳感。

そんな“非日常”を体感できる素晴らしい合同誌に参加できたことが、本当に光栄で嬉しいです。

作者の皆様が生み出す「排泄ストーリー」を読むのが今から本当に楽しみです。

今回はお誘いいただき
ありがとうございました！

友屋勘九郎



百合スカ × 背徳行為小説誌

i m m o r a l g o e s d o w n

[小説] もちづきうずめ

[イラスト] 友屋勤九郎

サークル『CRもちづきうずめ』

2020年 3月 8日 第1刷発行

2020年 7月21日 電子版第1刷発行

初出イベント SC2020 Spring 内 すか天 (中止)

★頒布価格／900円 +税

発行者：もちづきうずめ

印刷所：

連絡先：mochiuzu@gmail.com

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
発行者に認められた場合を除き、著作権の侵害になります。
また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、
いかなる場合でも一切認めません。

無断でインターネットなどへのアップロードを発見した場合、
DL数×頒布価格請求しますことを申し添えておきます。

背徳の闇に墜ちていく。

「センパイ、ごめんなさい。今日も我慢、できませんでした」
ある公立高校の部室棟女子便所、一番奥の和式トイレにて。
無防備な姿を覗く、卑怯者の瞳があった。

「~~センパイ~~は私のことが好き？ 愛してる？
じゃあ、私も~~センパイ~~のことを愛してあげるべきだよな」

AWB REC 0:05:12

AM07:49 43分

AUTO REC SD

SD 2h03m

AVGHD 1080p

発行サークル：CRもちづきうずめ

MENU

遥か彼方、手の届かない場所にあるもの
遥かな望み、手の届く距離にあったもの
水平線の彼方、手の届いた先の深淵

#盗撮 #自慰 #同性愛 #偏愛 #嘔吐

ガーリッシュハートエイク1 シュガーエイジ

ガーリッシュハートエイク2 Sing-a-Link-a-HoneyJam

#窃視 #排泄支配 #同性愛 #共依存 #囁き

淑女ノ不条理

淑女ノ不平等

#いじめ #下剤混入 #洋式で排便禁止 #復讐 #公衆面前失禁